

「梅雨期における効果的防除対策」

いよいよ梅雨入り。病気が発生しやすい季節です。長期的に天気を見据えながら、しっかり防除していきましょう！

[カンキツ黒点病]

カンキツ黒点病は、雨などの水を介して伝染する病害で、梅雨期は主要な感染時期にあたります。カンキツ黒点病の防除には、ジマンダイセン(ペンコゼブ)水和剤を散布します。この剤は、温州ミカンの場合、散布してから1ヶ月または降雨量200～250mmまで防除効果を発揮します(マシン油加用時は300～400mm。ただし、マシン油乳剤は7月以降に使用すると果実の糖度低下や腐敗果の増加の原因となるので、6月までの使用)。つまり、前回散布してから1ヶ月たっていないなくても、累積雨量が前記の基準を超えた場合、再散布が必要です。また、基準の降雨量に達していない場合でも、今後の天気予報で、雨が降り続き、降雨量が多いと予報される場合は、早めに散布した方が賢明です。雨の降り方は、圃場によって異なるので、「簡易雨量計」を設置して、適期の防除に努めましょう。

耕種的な防除も重要です。残っている枯れ枝(特に太いものは要注意)は、伝染源になりますので、必ず取り除いてください。また、樹の内部の枯れ枝だけでなく、間伐樹の切り株なども伝染源となります。伐根して園外で処分することが基本ですが、もしできない場合は、病原菌の胞子が風で飛散しないように肥料袋等をかぶせましょう。

[簡易雨量計]

防除効果に大きな影響を及ぼすのが、前回薬剤を散布してからの雨の量です。どのくらい降ったのか把握し、「もうそろそろ防除しなければ!!」と気づくことで、適切な防除ができます。近年は、場所によって雨の降り方が異なることが多くなっています。自分

でしっかり把握し、必要に応じて防除するように心がけましょう。

作り方の詳細については、「佐賀の果樹 2012 年 6 月号」をご参照ください。



簡易雨量計

[ナシ黒星病]

ナシ黒星病は、3月下旬～7月上旬に低温で雨が多い年に発生が多くなります。しっかり防除していきましょう。

まず、黒星病が発病した果実や葉は周囲への伝染源となるので、摘果時及び新梢管理時に必ず除去することが重要です。6月中旬まではキノンドーフロアブルやフロンサイドSC、ベルコートフロアブル等で対応します。6月下旬は収穫期に生じる黒星病の発病を抑えるうえで非常に大事な時期となりますので、本病の発生の有無にかかわらず DMI 剤(スコア顆粒水和剤、アンビルフロアブル)を特に丁寧に散布してください。また、毎年、黒星病が発生する園や、園内に黒星病が散見される園では6月下旬の1回だけでなく、7月上旬にも DMI 剤(スコア顆粒水和剤、アンビルフロアブル)を追加散布してください。なお、防除効果を向上させるために展着剤を加用することもあります。DMI 剤は、展着剤を加用することで防除効果が低下しますので、DMI 剤の使用時は展着剤は加用しないようにしましょう。



ナシ黒星病

[ブドウベと病]

ブドウベと病は、風雨によって伝染します。本病は、主に葉裏の気孔から侵入しますが、葉裏のみの防除で対応できるかというところではありません。葉表側にも薬剤を十分付着させておかないと防除効果を適切に保持させることはできません。葉表に薬液が付着していれば、雨とともに薬剤成分が他の葉に再付着し、病原菌の感染を防ぐことができます。このため、手散布の場合は棚下のみでなく棚上からも十分に散布するようにしましょう。スピードスプレーで防除をする場合は、一列おきに走行すると、走行した列の真上の部分については表側、走行しなかった列については、葉表、葉裏の両方で付着量が少なくなっています。スピードスプレーで防除をする場合も葉裏はもちろんのこと葉表にも薬液をきちんと付着させる必要があるため、できる限り低速走行で全列走行を行いましょ

う。

なお、べと病が多発するような年であっても、少発生に抑えられている園があります。べと病が多発した年の多発園と少発園を比べてみると、少発園では散布間隔が長くても三週間以内(平均で二週間程度)、薬剤散布後の累積降雨量が約200mm以下で防除されました。しかし、多発園では、散布間隔が長いときは1ヶ月以上開いており、累積降雨量も400mmを超えていました。袋かけ後はボルドー液(ICボルドー66D、ICボルドー48Q等)をきちんと散布すれば防除できますので、散布間隔を開けすぎないように注意してください。なお、ボルドー液にアビオンEを混用すると防除効果が向上するので、袋かけ後にボルドー液を使用する場合はアビオンEを混用してください。



ブドウベと病